

ハノイ医科大学と第5回ワークショップ：PrEP参加者の視点から考えるPrEP
(2022年8月25日)

プロジェクトの重要なパートナーであるハノイ医科大学とは、若手を中心とした研究者との研究活動の紹介・共有を定期的に行っています（[第1回](#)、[第2回](#)、[第3回](#)、そして[第4回](#)については各リンク先ご参照）。今回は如何にPrEP（HIV薬の曝露前予防内服）使用者がきちんと薬の服用を続けられるかを考えるため、PrEP使用者であるMSM（男性同性愛者）の実情に迫り、PrEPを実施している人たち自身がPrEPをどう捉え、何がその継続を難しくしているかを、日本とベトナムから一緒に考えました。

日本側からは、PrEP使用者・非使用者へのインタビュー結果をまとめた「関係性の中で変化するHIV感染症に対する曝露前予防の位置づけ」が発表されました。発表の中で、PrEPは主体的にHIV感染から自分の身を守る手段として、使用者の「HIV感染の不安からの解放」や「性生活の質の向上」につながる一方、PrEPがHIV感染を予防してくれることから「PrEPの使用者＝性に奔放な人」、「PrEP使用＝コンドーム不要」といったPrEPへの負のイメージや誤解により、PrEPの中断を招いてしまった事例が紹介されました。



ハノイ医科大学でのオフライン参加者は限られましたが、オンラインでは多くの参加者が得られました

PrEP使用者に対する同様のレッテルはベトナムにも存在するようで、PrEPを男性同性愛者と結び付けて広報されているベトナム社会では、PrEP希望者が一般の医療機関で薬を受け取るハードルが高く、そのためPrEPへのアクセスの障害となっていることが共有されました。

ベトナム側からは、PrEP中断者へのインタビュー結果をまとめた「PrEPケア継続の多層的な困難に対するMSMの認識：2020年の質的研究」が発表されました。PrEP中断には、薬の負担や副作用などの個人レベルの要因、PrEPクリニック等につまわる組織レベルの要因、PrEPに対するスティグマやCOVID-19のインパクト等の構造レベルの要因が多層的・複合的に関連していたことが共有され、各レベルの要因への効果的な介入の必要性が示唆されました。また、現在試験的に実施されている長期作用型PrEP注射について、痛みや副作用などの懸念があるものの、全般的には肯定的に受け入れられているそうです。



JICA-SATREPS プロジェクト
ベトナムにおける治療成功維持のための“bench-to-bedside system”構築と
新規 HIV-1 感染阻止プロジェクト



今回のワークショップでは、PrEP 継続を促進するためには、PrEP 使用者のメンタルヘルスの把握と使用者それぞれの状況に対応した適切な支援が重要であると双方の意見が一致しました。ハノイ医科大学の Sexual Promotion Clinic (SHP) では、メンタルヘルスについて診察時に簡易かつ段階的なスクリーニングを行い、必要時には精神科医や心理士につなぐ取り組みが行われていることが報告されました。こうした取り組みは、今後日本でも参考にできると考えられます。

HIV 予防の観点からはその有効性が十分確認されている PrEP。しかしそれが長く実施されるためには、使用者が PrEP をどう思うかに思いを馳せる必要があり、また周りが PrEP 使用者をどういう風に見るかという偏見の問題も PrEP を続けられるかどうかに影響する点など、当事者からの視点からはとても学びが多いものでした。今後の PrEP 継続を支援するための色々なヒントが得られた、そんなセミナーでした。